

□あしがき

政治経済の教師として、「社会にある答えのない課題を、生徒と一緒に葛藤する」そんな授業がしたいと、常々、思っている。

5年前に見た、在日の自閉症の男性を描いた自主制作ドキュメント映画『自転車で行こう』。映画の中で、彼と幼なじみの健常者の女性が言った台詞は強く印象に残っている。

「小さい頃は彼に“アホ”って言ったらアカンと教わった。

けど、彼と長く付き合ってきて、(アホなことをしたら)

“お前、アホか”と平気で言えるようになった”。

日常から接するアリノママの力強さ。日頃、生徒たちが「お前、ガイジ(ショウガイ)か」と平然と言ってくるのける感覚に強い不快感を感じるのに、強く指導できない自分自身がいた。

その後、日本財団のビデオを見たり、障害者施設で働く知人に話を伺ったこともあった。郵政解散の2005年夏、四条河原町で参議院議員と、障害者自立支援法について議論したこともあった。

社会の仕組みから考えさせることはできないかと思っていた時出会ったのが、『障害者の経済学』(中島隆信著/東洋経済新報社)。

クールに、同時に温かみのある視線で障害者福祉や教育問題を解説。著者の学問への姿勢に目頭が真っ赤になった。

この本を手にした時、隣に妙なタイトルと講談社ノンフィクション賞受賞の帯が目に入った。『こんな夜更けにバナナかよ』(渡辺一史著/北海道新聞社)。清く正しい障害者のお涙頂戴の話ではない。進行性筋ジストロフィーと闘う鹿野さんと24時間体制で支えるボランティアとの交流は、生臭く人間らしさ満載。「障害者といっても、エゴもあれば欲もある、普通の煩惱にまみれた人間」の生き様がそこにあった。

この2つの本を絶賛する私に同僚の先生が薦めてくれたのが『無敵のハンディキャップ』(北島行徳著/文春文庫)。障害者プロレスのドッグレッグスを描いたこの本。生身でぶつかる様は、ありきたりな障害者福祉に対するカウンターとして強烈だった。生でドッグレッグスを見てみたいと思った。

『母よ、殺すな』(横塚晃一著/生活書院)と映画『さようならCP』(原一男監督)。日本の障害者運動の歴史に残る「青い芝の会」を描いた2作。障害のある子どもの行く末を悲観して親が子供を殺害。同情する世間の減刑嘆願に「殺される側」の当事者が異議申し立て。「あってはならない存在」とされることの差別を暴いた自立生活運動は、言葉にできない重みがあった。

幾つもの名作に出会ったが、障害者問題の何を切り口に生徒と考えるべきなのか、わからなかった。ある時、大手出版社の編集者に相談。「考えるのではなく、一緒にになにかすることではないでしょうか」と言われた。そして、あるドキュメンタリー番組の話を聞かせてくれた。盲学校の生徒がサッカーチームを作ったという。ボールに鈴をつけて、猛練習。熱心な顧問の先生は公立中学のサッカーチームに練習試合をお願いした。結果は、健常者の公立の生徒たちのワンサイドゲーム。余りの大差にコールドが申し出られた。しかし盲学校の生徒たちは、最後まで試合をさせて欲しいと懇願。続行する試合の中で、必死にボールを追う盲学校の生徒の姿に、段々と健常者の生徒たちの表情が変わっていったのが印象的だったと言われた。

なにか、障害者と一緒にやってみる。確かに考えることよりも直に接してみることはより多くの事を学べると思った。けれど、271人に何を一緒にやらせたらよいのだろう。果たして授業として、義務的にやらせて学べることはあるのだろうか。わからなかった。

悶々とする中で読んだ『獄窓記』(ポプラ社)。



元国会議員の山本謙司さんが明らかにした刑務所の現実。「俺はこれまで生きてきた中で刑務所が一番暮らしやすかったと思っているんだよ」そう語る障害のある受刑者。

2008年2月、大阪でのシンポジウムで山本謙司さんと出会い、相談もさせて頂いた。

「山本さん、俺たち障害者はね、生まれた時から罰を受けているようなもんなんだよ。だから罰を受ける場所は、どこだっていいんだ。どうせ場も場所もないし……また刑務所の中で過ごしたっていいや」

この日本に成人後の人生のほぼ全てを刑務所で過ごさざるを得ない障害者がいる現実を生徒に知らせたいと強く思った。

累犯障害者に胸を痛める中で、私の自宅近くにギャラリーが現れた。Gallery Incurve。http://incurve.jp/ 厚労省の期間限定プログラムとして船場に現れたギャラリーで見た芸術作品は、心躍る格好良さがあつた。それが障害者の作業所で作られたものであると知り、益々心躍った。その作品に魅了されつつ、こんな取り組みをされる方に強く興味を覚えた。※この冊子の挿絵は全てIncurveの作品。カラーで紹介できないのが本当に残念でならない。

読売テレビ堀川雅子プロデューサーのご助力でインカーブの今中博之理事長と直接話す機会も得た。くるりんぱ。既成の概念を交換し、打ち破る発想力。そこには幸せをデザインする強い意志の力があつた。この方こそ、生徒と「対話」して頂きたいと思った。

芸術の力で高い評価を受ける障害者がいる一方で、刑務所にしか行き場がない障害者がいる。生徒に是非知ってほしい事柄はいくつも見つけた。そこには猛烈に訴える力があつた。けれども、自分自身のこととして障害者を考えるには、なにか非日常的にも思えた。

そんな時「ガイジ」で検索して見つけたのが、掲示板「知的障害者のきょうだい」。http://www2u.biglobe.ne.jp/~arakusa/works/kyoudai/kyoudai01.html 余りに赤裸々な書き込みに、思わず屋外に飛び出して夜風に吹かれて考え込んだのを覚えている。

2年前、妹に知的障害があると言った友人は、「当事者でない人に知的障害者のことが分かんと思わない。分かって欲しいとも思わない」と言った。また去年、この授業を相談した無二の親友から「きょうだいに障害があつたこと」を聞かされた。10年来の付き合いになる彼女から、そのことを知らされたのは初めてだった。

どうして彼は「分かんと思わない」と言ったのか。どうして彼女は「もう聞かないで欲しい」と言ったのか。私たちの社会には、何らかの障害を持つ人の割合は、少なくとも5%。障害者を身近に感じない日常のすぐそばに、障害者を考える鍵があつた。

「知的障害者のことを分かんと思わない」と言った彼。その言葉の重さ。私はどんな考えを持つべきか。答えは出ない。

「悩んで初めて人生が分かる」。本村洋さんとの5年前の出会いの中でそう感じた。犯罪被害者として関わられた本村さんは「人生とは偶然を必然にかえる過程である」という言葉が好きだと言われていた。障害は不便ではあつても不幸の原因とはいえない。障害に悩みもがきつつも、力強く生きる様々な姿がこの5年間私を駆り立てた原動力だつたと思う。これからもその力強さを学ばせて頂きたい。

この授業に至るまで本当にたくさんの方からご指導を頂きました。きょうだい現実と向き合い、考える重みは計り知れません。話してくれた彼・彼女に心から感謝申し上げます。

2009年2月21日

高槻中学・高等学校

公民科教諭

楊田 龍明

※この冊子の文章は、課題として先の掲示板を元に生徒の意見を募ったものです。中には当事者の方を傷つけかねない不適切な意見や表現が含まれています。様々な意見の中から考える力を養うために率直な生徒の意見を大切にしました。ご理解の程、お願い申し上げます。

